MADE IN SHIMONOSEKI
まちの主役

バレエダンサー講師 槇本 彩子さん

ドイツのバレエ団で主役を演じるなどプロのバレエダンサーとして活躍。現在は下関でバレエ教室を開き、自身の経験を生かしながら指導にあたる槇本彩子さんを紹介します。

恩師と共に生徒と共に歩むバレエ人生

人との出会いに恵まれて

下関で生まれ育った槇本さんは4歳の時、幼なじみと一緒にバレエを始めました。そして、13歳の時、転機が訪れます。それは「出会っていなかったら、今の私はない」という存在の杉原和子先生との出会いです。「あなたは海外に行ってプロのバレリーナに絶対になる」と槇本さんの将来を信じてやまなかった杉原先生。先生の愛に導かれてバレエダンサーへの道を歩み始めます。

▲オフシーズンにドイツから帰国し恩師杉原先生の定期公演にゲスト出演。©有限会社 テス・大阪

バレエダンサーへの道

16歳になった槇本さんは「規律の厳しい学校で自分を追い込もう」とドイツの州立ジョンクランコバレエスクールへ留学します。「留学生活は、コンプレックスとの闘いや厳しい練習でつらい日々でした。それでも続けてこれたのは、どこかで、やりたいことをやっているという責任感や充実感があったのかもしれません。二度と戻りたくないと思うほど大変な2年間でしたが、そのおかげで今があります」と笑って当時を振り返ります。卒業後、ドイツのゲルリッツバレエ団に入団した槇本さんは、バレエ団のディレクターから名作「ジゼル」の主役に抜てきされます。「うれしかった

まちかどボイス

今月のテーマ
幼い頃の習い事

◀「幼児クラスの生徒たちの成長の先を見たい」と槇本さん。

▶コンクールのリハーサル中。「良い状態で生徒を舞台に送り出したい」と生徒一人一人に向き合う槇本さん。

一方、私に務まるのかというプレッシャーを感じたことを今でも覚えています。リハーサルも涙、涙でした」。演じきった後は「本当に気持ちよかった」と大きな達成感をかみしめます。その後、デンマークのピーターシャウフスバレエ団でソリストとして活躍しました。

再びバレエの世界へ

帰国後、事務職として働いていた槇本さんは、再び杉原先生に導かれ、指導者としてバレエの世界に戻り、故郷下関でバレエ教室「Ballet Schatz（バレエ シャッツ）」を開きます。「Schatz」とはドイツ語で「宝物」を意味します。生徒が第1位に入賞すると、その指導者に与えられる最優秀指導者賞。「『先生にプレゼントする』と言い続けていた生徒が、第1位に入賞し、本当に頂いたときは感動しました。一人では受賞し得ない賞なので」と宝物のような思い出を話してくれた槇本さん。「幼い頃からの積み重ねが重要となるバレエを続ける中で鍛えられる人間力は、社会で生きてくると信じて指導しています」と生徒の成長を切に願います。

3児の母でもある槇本さん。「家族の協力なしには続けられません」と家族の支えのもと、今日もレッスンは続きます。

編集後記

■農業をされている方は、元気で爽やかです。一人でも多くの方が農業に関わって、下関がパワーアップしますように！（ひ）
■高校の部活を取材。大声でのあいさつ、自分の体を追い込む厳しい練習。あふれる笑顔。青春してるなあ。まぶし過ぎ（き）
■体重管理や日々の練習など自分を律することが求められるバレエ。努力の先の優雅な舞台を生で鑑賞してみたいと思いました。（と）